

授業研究を“核”とする学校づくりに関する実証的研究 —泡瀬幼稚園・小学校（沖縄）の教育実践を中心に—

The Creative School Management Movement Centering on Teaching-related Research
: The Case of Awase Kindergarten and Elementary School

狩野 浩二
Kouji KARINO

【要旨】

筆者は、1995年から沖縄における「授業研究を“核”とする学校づくり運動」に関して調査研究を継続してきた。その成果の一部はすでに公表してきている*¹。

沖縄では、1975年5月に斎藤喜博、林竹二が那覇市立久茂地小学校を訪ね、同校の校長であった安里盛市との交流が始まった。その後、教授学研究会の会員が沖縄の学校を訪ねたり、沖縄の教師たちが会の活動に参加をするなど、長期間にわたって教育研究運動が展開してきている。他の地域においては、斎藤喜博の没後、次第に学校づくり運動そのものは衰退し、現在では、ほとんど運動の展開をみないのに対して、沖縄の場合は、特異である。現在において、研究会である「沖縄第三土曜の会」が継続し、若い教師たちがその活動に参加するなど、学校づくり運動がしっかりと根付いているのである。本研究では、この展開について考察するとともに、いかにして沖縄の学校づくり運動が維持され、今日において、その成果が蓄積されているのか、という実態に迫ることが目的である。

沖縄県沖縄市立泡瀬小学校・幼稚園は、沖縄本島の中部、沖縄市の東海岸に位置する公立学校・園である。「沖縄第三土曜の会」において実践的な研究を続けてきた宮城和也校長が2014年度から学校づくりを開始した。その特長は群馬県島小学校（以下「島小」と略記）以来の学校づくり運動を継承するとともに、“表現活動”によって、子どもの心をひらき、子どもの集中力を育てる教育実践にある。

筆者は、2014年度において、10月から12月までの間、延べ15日間、2015年度において10月から12月まで延べ10日間にわたって入り、共同研究を行ってきた*²。

1. なぜ沖縄に注目するのか

本研究において使用する「授業研究を核とする学校づくり」とは、斎藤喜博（1911－1981）が、校長職（1952－1963）にあった群馬県佐波郡島村（当時）小学校（以下、島小）において、その研究成果を8次に及ぶ「学校公開研究会」において全国に向け発表したものを原点としている。その影響のもと、1970（昭和45）年代以降に、全国の小学校、中学校、高等学校、大学、幼稚園、保育園において展開された運動にその成果が引き継がれた。本研究が対象とする、沖縄県沖縄市立泡瀬小学校・幼稚園は、その系譜のひとつに位置付く。

本研究は、「斎藤喜博研究会」による共同研究^{*3}の一部として展開しているものである。そのなかで、島小に続く学校づくりがいかにして沖縄において展開し、現在どのような成果をあげているかということについて検討するものである。

筆者は、1995（平成7）年から沖縄に職を得、それ以降、沖縄において「授業研究を核とする学校づくり」の展開について、調査研究を継続する機会を得てきた。その後、1998（平成10）年からは鹿児島、2007（平成19）年からは埼玉に移ったが、継続的にその学校づくりに関する調査を実施してきた。

1995年以前の動向は、文献調査と関係者へのインタビューにより光をあててきた^{*4}。1995年以降は、各学校において校内研修会や学校公開研究会等に参加し、子どもたちや保護者、教職員などの状況や校内研修の実際、授業研究、表現活動の指導などに取り組んできた。

かつては全国に広がったこの運動が次第に衰微する中で、唯一沖縄において島小における授業研究、学校づくりを継承する動きが継続している。それには、本土（内地）とは海によって隔てられ、歴史的にも文化的にも本土（内地）とは異なる沖縄の地において、教育研究を推進する上で“学校内”における校内研修を充実させることがなにより必要だったことが大きく関係してきてい

る。特に、離島や僻地を多く抱えるこの地においては、学校の教職員が“学校外”において学ぶ機会は少ない。学校を離れて研修することは、物理的に難しい^{*5}。

そのような地理的、物理的制限の中で、島小から続く本運動が、「学校づくり」を志向していることにより、沖縄に定着してきたとみてよい。

何より「授業研究」は、授業の事前や事後の研究に加えて、授業中における研究を展開する必要がある。それが、島小以来の大きな成果であり、そのことを生かす上で、皮肉にも、沖縄の離島僻地という一見すればマイナスに捉えられがちな環境をプラスに変えてきた。

実際、これまで本研究において調査した学校は、久米島町立久米島幼稚園・小学校（久米島）や伊江村立西幼稚園・小学校（伊江島）のような離島が含まれている。こうした地域は、この運動の研究成果を生かすのに最適な学校であった。

比較的交通便利な那覇近郊においても、那覇市立識名小学校を皮切りに、宜野湾市立長田小学校、那覇市立宇栄原小学校など、授業研究を核とし、学校づくりを志向する本研究は、各学校の教育方針と合致する。特に沖縄における学力向上運動に対して、大きな貢献をしてきている^{*6}。

さらに大きな要因としては、1970年代の沖縄において、斎藤喜博や林竹二（1906－1985）が沖縄県那覇市立久茂地小学校を訪ねたこと（1975年5月）がある^{*7}。県の校長会長を辞し、久茂地小の学校づくりに打ち込んだ安里盛市は、久茂地小学校校長として、斎藤喜博と林竹二を校内研修に招き、実際の授業を通して子どもが変わるという事実を目の当たりにした。このことを契機として沖縄における学校づくり運動が展開したのである^{*8}。

2. 泡瀬幼稚園・小学校における学校づくりの展開

泡瀬幼稚園・小学校は、2014（平成26）年4月に宮城和也が校長として赴任し、今年度2年目の

学校づくりを行っている。

宮城は同校に赴任する以前は、県内各地の小学校をはじめ、沖縄県教育委員会事務局において社会教育（生涯学習）分野の指導主事を務めている。教員振り出しの頃から、安里盛市、西江重勝が中心となり研究を継続してきた「沖縄第三土曜の会」において研究を続けてきた教師である。そのなかで、斎藤喜博による学校づくり運動の展開に関心を持ち続け、校長となった2012（平成24）年から、授業研究を核とする学校づくりを開始した。

校長としての初任校は、沖縄県浦添市立宮城小学校である。この学校は、かつて、同会の西江重勝が教頭として勤務し、教授学研究会で世話人をしてきた野村新^{*9}が授業や表現活動の指導に入った。その当時制作された総合表現「不死鳥の如く」は、当時、第1章のみであったが、宮城小の児童によって初演されている^{*10}。

宮城は、校長の初仕事として同校に赴任したものの、2年で泡瀬幼稚園・小学校に異動となる。

宮城による、初めての学校づくりは、宮城小学校・幼稚園において展開した。しかしながら、配置から2年で現在の学校に異動することとなった。宮城によれば、宮城小での学校づくりは、必ずしも順風満帆ではなかったということである。事柄の性格上、その原因究明は慎重に行わなければならないが、二年間という短期間の在職では、思うような学校づくりが行えなかったということと、新任校長としての張り合いとは正反対の方向で、力みや緊張が宮城の学校づくりを阻んだと想像できる。

沖縄市にある泡瀬幼稚園・小学校に赴任後、宮城が最初に行った仕事は、学校行事の見直し、修正であった。学校行事の場は、全ての教職員が幼児や児童の姿をみるわけであり、一種の校内研修の場といってもよい時間である。ここにおいて、宮城は2つの提案を教職員に対して行い、その成果が校内において教職員の気持を変えることにつながったということである^{*11}。

その一つ目の提案は、全校朝（集）会の改善・

改良である。泡瀬小学校の児童数は、632名^{*12}、学級数は、22、教員数は26名である。この学校において、従来はマイクロフォンやアンプ（拡声器）を使い全校朝会を行っていたということである。そこで宮城は、マイクやアンプを使わずに肉声（地声）で会を行うように提案し、実行したのである。たったこれだけのことはあるが、児童は進行役の教師の声に耳を傾けるように変容したという。児童会の児童が発表する際は、自分の声で堂々と発表する。宮城校長が赴任した当初は、誰かが前に出てマイクを使って話していても構いなしでおしゃべりに興じる子どもがいたということである。それがこのことによってなくなる。児童や教職員全体が穏やかに冷静に行動するように変わっていったということである。

もう一点は、全校朝会や体育の授業時間、運動会などの際に校庭に引かれる白線を引かないようにしたことである。子どもが円陣を組みリズム運動をする際や行進する道筋をそれまではひとつひとつ教師たちが白線によって示していた。子どもたちはその線を辿ることに夢中になってしまい、いきいきとした動きにはなっていなかった。そこで校長の宮城は、白線を引かず子どもたちが自分で考えて歩いていく目標を定め、そのことに集中して取り組むようにした。

教師たちは、白線の導き無しで子どもが自ら行動できるとは当初は考えていなかったとのことである。

しかし、実際に白線のない校庭で子どもたちは自分で考えて仲間との距離を目測で測り、適度な間隔を保持しつつ美しい姿で行動できるように変容する。

このように実際の指導場面において、子どもたちの課題を即座に把握し、その解決のために教師の指導方法を瞬時に改めていくということが、島小以来継続してきた学校づくりの特質である。宮城は目の前に展開する児童の姿に学び、その姿をより質的に向上したものにするという事実を全校児童や教職員が見守る中で実現させていった。

宮城によれば、この2つの出来事によって同校の教職員の中から、とにかく校長の言うようにやってみようという雰囲気が生じたということである。“沖縄第三土曜の会”のメンバーが行ってきた学校づくりにおいては、西江重勝が校長として学校づくりを展開した沖縄県那覇市立識名幼稚園・小学校、国頭郡伊江村立西幼稚園・小学校で幼児や児童の姿を指導展開の最中に変容させるということによって教職員の気持を一つにまとめた。このことは沖縄以外の地域においても同様であると思われる。

3. 学校づくりの“核”になるもの

宮城は、泡瀬小に赴任した当初から先述の通り幼児や児童の姿を変容させ、さらに授業や表現活動の研究を深めることで学校づくりを深化させてきた。初年度（2014）は、授業研究成果の発表の場（学校公開研究会）はつくることができなかったものの、表現活動の取り組み成果を発表する機会をもった。幼児から小学校六年生までが歌唱表現、朗読表現、身体表現などの活動に組み、その成果を発表^{*13}したのである。

その際、島小以来の学校づくりにおいて、その学校づくりの特質となって来た“表現活動”に着目した点に特色がある。これまでも、特に身体表現活動の持つ意味に関して、さまざまな検討が行われてきている^{*14}が、筆者が見る限りにおいて、身体を駆使する活動には、子どもたちの意識や思考、表現力を一変させてしまうほどの意味がある。

例えば、泡瀬幼稚園^{*15}の幼児が取り組んだ「おおきなかぶ」では、当初、幼稚園の教師たちは、小学校の広い体育館で子どもたちが活動するなど無理であると話していた。ところが、10月から隣接する泡瀬小学校の体育館で87名の幼児たちが「おおきなかぶ」の練習を開始したが、かえって広い体育館で幼児たちはいきいきと活動を始めたのである。

筆者は、少しずつ意識が散漫になって来た子どもが出てきたところで子どもたちを体育館の中央に集め、全員を床に座らせた。その上で、「おおきなかぶ」の歌や台詞に自信がある子がいるかどうかを尋ねてみたのである。幼児たちの歌い方や語り方を見ていると、足下がふらふらとしていたり、仲間に頼るようなしぐさが見える。

すると体育館に集まった幼児のうち、ほぼ半分くらいの子がその場に立ち上がった。立ち上がった子の中には、仲間に引きずられて、訳も分からずに立ち上がった子がいたようであるが、それはともかくおいておき、立ち上がった子たちにお手本を見せてほしいと話した。自信がないということで、体育館の床に座り続けている子たちには、これからお手本を示してくれる子たちの中で、特にどの子の歌いぶりがいいか、話し方がいいかを見てほしいと依頼した。床に座ったままの“自信がないグループ”の子たちは、これから始まるお手本の表現活動がどのようなものであるか興味がわいてきたようである。適当な間隔をとって、かなり真剣な表情で仲間の姿を見ている。

いよいよ、お手本の子どもたちが歌い始めた。指導者役の筆者は、体育館の床に座り、仲間の表現活動を見る子どもたちの後ろ側にまわり、表現する子どもたちに正対し、かなり大げさな手振りや身振りで、子どもたちの歌を引き出すように指揮をした。すると、聞いているはずの子どもたちが、次第に座りながらも身体を動かし始めた。仲間の表現活動に触発されて、自然と歌い始めているのである。

お手本演奏の後、見ていた子どもたちに、どの子の歌いぶりがよかったかを尋ねてみた。子どもたちは、口々に誰々ちゃんのがよかったと言い始める。名前を言われた子たちは、照れ笑いをしながらも、満足そうな表情であった。

続いて、自信がなかった子（先ほどまで床に座って聞き役にまわっていた子）たちの表現活動を、今度は、お手本グループが見る番である。おそらく、お手本を見て学んだ子たちは、その表現

活動の姿から学び、上手になっているだろうと想像はしていたが、はたして子どもたちは、先程のお手本以上に元気に歌唱表現を始めたのである。

幼稚園の先生方には、子どもたちの姿を子どもたちから離れて見るようお願いをした。こうすることで、子どもたちは先生を頼らずに自分でしっかり立ち、しっかり歌う心構えができると考えたからである。冒頭の練習風景では、幼稚園の先生方は子どもたち全体を見るのではなくて、いくつかの気になる子どもの側にくっついてしまっていて、全体が見えていなかったのである。“気になる子”達にとっては、いつものように指導してくれる先生が側にいることで、その先生に頼ってしまって、さらに甘えるようなしぐさをする。事後の研究会では、幼稚園の先生方から、やはり気になる子どもの側に寄り添っていたいというような話が出た。しかし、現実には、先生方が離れてみていた方が、かえって“気になる”子たちは、しっかりと表現活動に没頭できているのである。

11月にはこの子たちはすっかり歌詞を覚え、台詞も覚えてしまっていた。そこで、子どもたちの歌や朗読を聞いた後で、筆者は子どもたちに対して体育館の床を足の裏でしっかり掴むように話した。立ち姿がどうもふらふらとしていて、歌唱や朗読の声に張りがなかったからである。子どもたちには、自分の足の指で地面をつかむように話してみた。「お猿さんみたいに」とたとえ話で理解させようとしたが、これはこれで、功を奏したようである。子どもたちの中には、お猿さんのようにキーキーと鳴き真似をする子が出てきた。全体的に見ると子どもたちの立ち姿が美しくなった。裸足で体育館に入って来た子どもたちは、足の裏で直接的に体育館の床に触れる経験をする。日常的には、裸足による保育活動や遊びは積極的には取り入れていないようであるが、表現活動の場合には、必ず裸足になるようお願いをしていた。やはり靴を履いたままでは、足の指の機能を総動員した立ち方をすることは難しい。裸足になることにより、足の指先までも神経を行き届か

せた表現活動が実現するのである。こうした原則は、島小以来の学校づくりににおいて共通していることであり、裸足による活動は子どもたちの意識を覚醒することに役立っている。

地面を足の裏で足の指を総動員して掴むように立ち上がった子たちは、実に素晴らしい歌声に変容した。指導していた筆者自身が、まさかこのように素晴らしい歌声になるとは想像をしていなかった。身体を柔軟にし、身体の全て、全身を使いこなすという原則は、島小以来の学校づくりににおいて徹底されてきているが、このようなとっさの場面において、子どもの歌声や立ち姿が美しく変容するのである。子どもたちの持つ潜在的な可能性の大きさにまったく驚かされるのである。

10月の当初には、この園児たちは子ども同士がくっついてしまって団子状態になってしまったり、自信が全くないというように壁際に貼り付いていたのである。それが次第に旋律や歌詞を覚え、語りの台詞を覚える中で胸をはって表現できるように変わるのである。

もう一点は、今回は“授業”に関する公開研究会を開催できなかったものの、学校づくりの基盤に“授業研究”を据えている点である。一学期から二学期を通じて、外部講師（西江重勝、川嶋〔旧姓児島〕環^{*16}、上間順一^{*17}、筆者）を招聘した授業研究会が実施された。泡瀬小学校の全ての教師が授業づくりに取り組んでいる。授業を通して子どもの姿が変わっていくという事実を提示することによって、教職員の意識が変容していった。島小においては“親方の一時力”とか、“介入授業”、“横口授業”と呼び習わされていた^{*18}、授業の最中において学ぶ授業研究が泡瀬小において展開した。この学校では“協働授業”と呼称し、学級担任と指導者とがともに力をあわせて授業づくりを行うというようなイメージを共有している^{*19}。これは上述の表現活動自体がその活動の最中にとっさに指導者役を替わったり、参観者がアドバイスをしたりするなど“協働授業”なのであるが、このことを一般的な授業研究の世界に定

着させたことが島小以来継続してきた学校づくり運動のもっとも大きな成果であるといつてよい。

実際、授業の事前検討会や事後検討会では得られないような授業の最中にとっさに子どもの“つぶやき”の意味を拾い上げたり、参観者が授業者とバトンタッチして指導者役になったりすることで得られるものは大きい。これは、今年度(2015)において、経験したことであるが、2年生の授業(10月)において、筆者が参加していた協働授業では、受け持ちの教師が行う授業において「つぎはぎだらけの手ぬぐい」という国語教科書の記述をめぐって筆者が横口を出した。この日研究授業を行っていた受け持ちの教師は『かさじぞう』の読解指導において、「おじいさん」がつくった菅笠が5個(枚、蓋)、雪の中で寒さに耐えるようにしてたたずむ「お地蔵さま」が6人(尊、仏、体)、菅笠だけでは足りなくなった「おじいさん」は、自分の頭にかぶっていた「つぎはぎだらけの手ぬぐい」を最後の「お地蔵さま」にかぶせてやる場面である。事前の教材研究では、おじいさんが手ぬぐいをかぶせた後で「これでええ、これでええ」とつぶやくように口にする言葉を問題にし、「これ」が何を指しているかを考えさせるという指導過程を構想していた。ところが、受け持ちの教師はこの場面において6番目の地蔵にかぶせてやった「手ぬぐい」が「ボロ」であるというのである。とっさに筆者は、受け持ちの教師に許可を得て子どもたちに問いかけたのである。「おじいさんが6番目のお地蔵様にかぶせてやった手ぬぐいは、ボロでしょうか、それともボロではないでしょうか」。2年生の子どもたちは、とっさのことでキョトンとしている。そこで、同じ教室でこの協働授業に参加していた教頭先生に「つぎはぎ」の意味を説明してもらうことにした。以前教頭先生が家庭科専科をしていたことがあるということが思い出されたのである。教頭先生は、すこし控えめながらも、しっかりと説明を下さった。「ボロであるかボロではないか」ということは避けつつも、「つぎはぎ」が使っ

ているうちに切れたり、裂けたりした布を別の当て布などをして補修すること、修繕することであると話した。筆者は、再び「この手ぬぐいは、ボロでしょうか、それとも、ボロとはいえないでしょうか」と子どもたちに発問したのである。残念ながら、この授業は時間切れとなってしまったのであるが、学級担任の若い男性教員は、やはり「ボロ」であるといい、子どもたちもその解釈に傾いているようであった。この間は、わずかに五分足らずの時間ではあったが、学級担任の先生と筆者とで見解の分かれた「ボロ」問題をめぐって、2年生の子どもたちも非常に集中した学習を経験したのである。今から思えば、おじいさんは、手ぬぐいを一枚しか持っていないのか、それとも、たくさん持っているのか、というように、具体的に考えさせる中で、おそらくたった一枚の大事な手ぬぐいを、繕いながら大事に使っていたと解釈していく方がよかったと思うのである。このように思うような展開がつかれないながらも、集中のある授業展開を創造することができる。協働授業の醍醐味は、一瞬一瞬の授業展開の中に、集中の美を創造するところにある。

無論、事前検討会や事後検討会は大事である。それはそれで意味を持つものであるが、それに加えてこのように協働(横口、介入)授業により、授業の最中にその授業の内容や方法を実地に即して学ぶということには、教師にとっても、子どもたちにとっても実に大きな意味がある^{*20}。

これは後日談であるが、この後、この2年生は、受け持ちの学年教師たちとともに「かさじぞう」の表現活動に取り組んだ。学習発表会(2015.12.20)では、泡瀬小学校、幼稚園を通じて、もっとも成長し、最も美しい表現活動をこの2年生は披露したのである。特に、表現活動で子どもたちの前に立ち、子どもたちを指揮した2学年部の先生方は、学習発表会の前日に筆者に対して、この作品の指揮法について質問に来られたのである。筆者や共同研究の先生方から見れば、当初はなかなか台詞や歌詞が覚えられずにかなり心

配させられた学年であった。それがこの二ヶ月の間に先生方も子どもたちもしっかりと学び、大きく成長していたのである。

4. 学校づくり運動の難しさ

ところでこれまで島小を原点とする学校づくり運動の展開を検討する中で、こうした運動が次第に衰微し、特に内地（本土）ではほとんど広がりを見せないのはいかなる理由からであるか。それは結論から言えば、泡瀬小・幼では普通に行われている“協働（横口、介入）授業”や“身体表現活動”が教師たちからすれば大変高いハードルだからである。授業づくりはもちろんのこと、身体表現活動の指導にあたっては指導者自身の力が本当に如実に子どもたちの姿の上に現れてしまう。

島小を原点とするこの学校づくり運動は音楽や演劇などの芸術活動と共通する点が多い。演奏者や役者、指揮者や演出家の力が試される場が本番の舞台であり、学校教育であれば授業や学校行事である。それを学校教育の場において実現させようとしたところがもっとも一般には理解されにくいところである。

それに加えて学校教育の場合には子どもたちが特別な訓練、稽古を受けているわけではなく、普通教育として行うところに難しさがある。クラシックバレエの教室や音楽教室などの学校外教育（お稽古事）ではない世界をいかにつくるかということが課題なのである^{*21}。

島小から続く学校づくり運動においては、子どもの姿の上に美を実現するということが目標とされてきた^{*22}。ここでいう“美”は装飾や説明によっては実現し得ないものである。その上子どもたちは特別な訓練や選抜を経ていない一般公立学校の子どもである。その子どもたちの世界において授業や学校行事によって心をひらいて表現し、学習する事実を創造する。したがって、なかなか簡単には取り組めないものである。この運動において各学校が外部指導者を必須としてきた背景に

はこうした事情が存在すると思われる。

5. 学校づくりの意味

授業研究を核とする学校づくり運動の展開をさまざまな場面で発表したり、報告したりする機会を得てきているが、その際質問されるものの中でもっとも多いものは、こうした運動が拡がりにくいのはなぜかということである。このように大きな成果を上げており、誰が見ても子どもたちの姿には集中力があふれ、思考力や判断力には優れたものがある。学力・学習状況調査の結果を見ても年度ごとにその成果が現れてきており、特にB問題（いわゆる知識の活用に関する問題）についての結果が向上しているのである。本年度（2015）においては全国平均を上まわり、同市内において二番目の成績をおさめている。このような運動であれば、たやすく拡大するだろうという質問である。

結論から言えば、拡大するどころかこのような運動はできれば避けたいと思い、尻込みをする学校や教師の方が多い。それほどにも学校や教師たちにとっては苦勞が多く、我慢強く、辛抱強く、忍耐強くなければ決して継続することができない質の世界である。例えば、学習指導案を作成して授業に臨むが、実際の授業では子どもたちからどのような考えが提出されるかその時になってみなければ分からないのである。予め予想はしてあっても、予想通りの考えを出すとは限らないし、教師の予想や期待を裏切るからこそ子どもたちはそこで鍛えられるのである。教師が予想した通り、期待通りの考えだけを出しているとすれば、それは授業ではない。だれもがまったく予想もしなかったような考えが出てきたとき授業は成立し、子どもは思考力を高めるのである。

今回の協働授業においては、特別支援学級の授業で子どもたちから教師の予想に反する考えが提出される場面があった。教材は、「雨」という詩である。雨が「ごんごか」「ごかごか」「ごかざん」降るという独特なオノマトペイアにより、激しく

打ち付ける雨の音とその下で暮らす人々の生活に思いを馳せる作品である。筆者は、受け持ちの教師の許しを得て子どもたちに問いかけてみた。すこし授業が停滞し、授業者も見ているものも手を打ちかねた場面である。「この雨は今降っていますが、どの家にも降っていると思いますか、それとも、あるお家にだけ降っていると思いますか」。これは、全ての家に激しく打ち付けるように降る豪雨であるにもかかわらず、「ざんざか」「ざかざか」「ざかざん」降る雨の音を聞く人々（特定の人物—作者）の思いを想像させようとして問いかけたものである。今降っている雨の音を聞いている人々は、その全てが「ざんざか」「ざかざか」「ざかざん」降っているように聞いているであろうか。この疑問をそのまま直接的ではなしに、この作品が描かれた情景においては全てのお家の屋根をたたいているはずの雨の様子（しかし、作者は、別の家とは異なる雨音を聞いていたという情景）を明確化しようとしたのである。ところが、子どもたちは、「あるお家にだけ降っている」という考えにまともってしまったのである。今から思えば、この考えの背景には、「ざんざか」「ざかざか」「ざかざん」降る雨の音を聞いている人の家の屋根をたたきつける雨の音であり、あたかも、その家にしか降っていないかのような情景であると子どもたちは考えたのだと思う。筆者は、ある家にだけ“あたかも”降っているようであるという読解が出てくるとはまったく想像できなかったわけであり、このように、子どもの持つ発想や思考というものは、実に柔軟であり、こちらの予想を遙かに凌駕するものなのである。

こうした取り組みには実に苦労が多いのである。この授業に見られるように授業者や協働授業者が自分のもつ力を全てさらけ出し、子どもから出てくるものを体中の毛穴をすべて開いて感じとらなければ、予想通り、期待通りの展開にしかない。このようないわば一瞬一瞬の劇的な展開、いわば芸術の活動に比すことができるような追究の世界というものが授業である。したがって

このような世界に安易な気持ちで飛び込むことはできないし、尻込みをしてしまうのもやむを得ないことである。

“誰にでもすぐに分かる”とか、“誰にでもすぐにできる”とかいうような安易な生易しい方法や内容ではないところにこの運動の意味がある。なかなか到達できないような高みに迫りたいと願うところに意味があると考えるのである。

沖縄では、今そのように願う教師たちが学校づくりの仕事に傾注しているのである。

6. 泡瀬幼稚園・小学校における学校づくりの課題と今後

12月20日（日）、泡瀬幼稚園・小学校の学習発表会が開催された。島小以来の学校づくり運動においては、「学校公開研究会」を開催し、教育の実践や研究を専門とする方々に子どもたちの様子を見てもらい、その子どもの事実をもとに学び合うということが行われてきた。泡瀬においては、宮城校長の一年目、二年目の学校づくりにおいて、まずは「表現活動」を公開し、保護者や地域の方たちからその価値に気付いてもらうことと同時に、泡瀬の教職員が心をつにして学校づくりに取り組むことができる環境づくりに励んできている。宮城校長の二年目の学校づくりにおいて、その仕事はほぼ達成されたとみてよい。保護者の9割が今回の学習発表会を高く評価し、子どもたちの学力は順調に向上してきている。教職員は、初年度においては疑心暗鬼の空気が若干ではあるが存在したのに比して、二年目においては、全教職員が一つの方向に結束してきている。無論教員の人事異動によって、毎年教職員の構成は変容するし、幼児や児童も学年進行で少しずつ入れ替わっていく。

今回は、昨年度6年生として「不死鳥の如く」（総合表現）に取り組んだ児童が、中学校に進学し、中学校のキャリア教育の一環で一週間泡瀬小に入っていた。ちょうど学習発表会が行われる直

前の週で、各学年の授業では先輩である中学生たちがともに協働授業に参画した。朗読や歌唱、ステップなどの際には、中学生にも示範演技をしてもらったのだが、たった小学校6年生の1年間の学習によって、実に美しい表現ができるようになっていたのである。

したがって今後においては、新しく異動してくる教職員とともに、新入園児が如何に伝統を受け継ぐかが鍵になると思われる。新年度において、宮城和也校長三年目の学校づくりが実現する場合においては、島小以来の学校づくり運動において蓄積された成果をさらに具体的に学び合う機会を早期に実現することが肝要であろう。

* 1 2000年、伊江村立西小学校の教育実践、『鹿児島大学教育学部研究紀要』第52巻、193-210頁。2001年、「沖縄第三土曜の会」の教師と教育実践、『鹿児島子ども研究センター研究報告』No10、67-80頁。2004年、事中研究の実践、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第14巻、69-78頁。2005年、沖縄における現職教育の充実に関する教育実践、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第15巻、139-148頁。2006年、沖縄における学校づくり、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第16巻、51-67頁。2007年8月、沖縄・宇栄原小学校の学校づくりに学ぶ、『事実と創造』第315号、一荃書房、2-10頁。2009年1月、心をひらく学校—沖縄県那覇市立宇栄原幼稚園・小学校の学校づくり—、『学校マネジメント』No. 626、明治図書出版、56-57頁。2010年、これからの時代における教員研修のあり方に関する実証的研究—沖縄県宜野湾市立長田小学校及び、埼玉県新座市立新座小学校における教育実践を中心として—、十文字学園女子大学人間生活学部児童教育学科『児童教育実践研究』第3巻、第2号、89-96頁など。

* 2 本年度(2015)は、2015/10/19~23、12/14~20である。

* 3 横須賀薫、野村新、箱石泰和、小林重章、本

間正明、吉村敏之、廣川和子、田端健人、近藤幹雄、梶山正人(故人)、松本陽一(故人)。

* 4 狩野「沖縄における現職教育の充実に関する教育実践」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第15巻、139-148頁、2005年。狩野、「沖縄における学校づくり」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第16巻、51-67頁、2006年など。

* 5 実際、沖縄県国頭郡伊江村立西小学校、幼稚園の学校づくりでは、伊江島から北部教育事務所の研修会に参加するには、前日に島を離れ、研修後も、本島で一泊する必要があるとのことだった。

* 6 狩野、「沖縄第三土曜の会」の教師と教育実践、『鹿児島子ども研究センター研究報告』No10、67-80頁、2001年

* 7 安里盛市『林竹二・斎藤喜博に学んで』1992年、一荃書房に、この時の状況が詳しく紹介されている。

* 8 西江重勝『わたしの授業づくりの旅—斎藤喜博に学びながら—』一荃書房、2003年に詳しい。

* 9 元大分大学長。教授学研究会の世話人として、学校づくりに携わってきている。

* 10 その後、伊江村立西小学校において、全体が完成し、西小児童によって、初演された。

* 11 宮城和也からの聞き取りによる。2014年9月13日、学士会館にて。

* 12 2014年5月1日現在

* 13 当初案では、2014(平成26)年12月13日(日)において、学習発表会を実施し、幼児児童の練習成果を保護者向けに発表する予定であった。ところが、突然実施されることになった衆議院議員選挙の影響で、一週間延期することになった。たった一週間ではあるが、目標がずれたことによって、当初山場として設定した発表までの取り組みが、やや間の抜けたものになってしまった。発表した作品は以下の通りである。①幼稚園「大きなかぶ」、②小学校1年生「おむすびころりん」、③2年生「スイミー」、④3年生「手ぶくろを買いに」、⑤4年生「森はいきてい

る」、⑥5年生「かたくりの花」、⑦6年生「不死鳥の如く」。①、②、③、④、⑥、⑦の作曲は、梶山正人である。⑤は、林光による。⑥の作詞は、横須賀薫。⑦は、野村新である。

*14 横須賀薫「表現と教育」、細谷俊夫他編『新教育学大事典』（第一法規）、1990年。横須賀薫・梶山正人・松平信久編『心をひらく表現活動』（全3巻）、教育出版、2010年。狩野編『あたらしい特別活動』あいり出版、2014年など。

*15 2014年5月1日現在、87名（5歳児）である。

*16 元島小教師。1956（昭和31）年から斎藤喜博校長の下で教師となり、第2回公開研究会から第8回まで、島小の学校づくりに参加した。その後も、教授学研究会の会において中心メンバーとして各地域の学校づくりに参画してきている。

*17 伊江村立西小学校において、西江重勝校長に続き、同校の学校づくりを継承し、学校公開研究会を開催した。

*18 狩野「島小の教育実践：横口（介入）授業の展開とその意味」、『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』57巻、pp.133-149、2006年2月。

*19 識名小学校や西小学校の学校づくりにおいて、「介入授業」という表現が使われたが、「介入」という言葉に強烈なイメージを抱く向きもあり、長田小学校や宇栄原小学校の頃から、「協働授業」と呼称されることが多くなっている。

*20 狩野「事中研究の実践」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第14巻、69-78頁、2004年

*21 一般的にいえば、学校の学芸会や文化祭などの学校行事において取り組まれる“演目”は、大人が行う、あるいは、プロとして取り組む芸術活動の模倣である場合が多い。衣装や舞台装置に工夫を凝らし、照明や舞台化粧、一糸乱れぬ演奏、ハーモニーや曲想を集団としていかに一致させるか、といった取り組みは、本来鍛え上げられたプロフェッショナルにより、実現可能な世界である。したがってこうした取り組みは、自ずから専門教育の領域になってしまう。学芸会の出演者がオーディションによって選ば

れるとか、音取りが出来ない子どもは、歌っている“振り（いわゆる“口パク”）”をするとかいうようなことが実際の学校教育現場ではあるが、このようなことが果たして普通教育として行われてよいことなのかどうか、相当慎重に吟味する必要があると思われる。その一方で、コンクールやコンテスト、審査会に類する学校行事の存在は、学校外からの要請であったり、学級づくりにその連帯感を醸成する効果を活用したりと、さまざまな目的で取り組まれる。子どもの知識や技能、能力には、差があるのが当然であるし、向き不向きということもあり、形成的な効果を考えれば、その全てを否定することは出来ないが、競技スポーツや芸術活動、文化活動などにおける競争性排除の動きを見るにつけ、そもそもそのような形成的側面だけに学校が頼ることによいのかどうか、学校行事における内容、演目の吟味、検討ということは、今後当然必要となるのではないか。

*22 横須賀薫『斎藤喜博 人と仕事』国土社、1997年。

*23 沖縄においては、校長としての在職年数は一般的に2年であり、宮城校長の場合は、校長として勤務できる年数が残り2年ということであり、このまま留任できるかどうかの一つの大きな鍵となっている。

【附記】

本稿は、日本教育方法学会第51回大会（於：岩手大学）自由研究発表15-④において口頭発表した内容をもとに執筆したものである。2015（H27）年度十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けた。